

牛久 小さな旅

―蔵の街並み 井ノ岡町―

広報うしく市民特派員

齋藤 重

牛久市街から国道408号島田町信号で左に入り、ほどなくして正面に見える森が井ノ岡町集落です。浄妙寺を基点にして集落を歩けば、美しい土蔵が垣根越しに目に入りま

れ、これを持ちたいと一生の願望と努力をしたものでした。「くら」という字には蔵・倉・庫が当てられ、それらはほとんど同じ意味に使われましたが、文字が違うようにニュアンスも少し違い

さを感じます。蔵について特質を見ると、夏は涼しく冬は暖か、風に堅牢、火災にも安全、泥棒の防

ががあります。もともと大切なものを隔て隠す意味から出た蔵の第一の目的は貯蔵・格納で、名前をあげてみると醸造蔵、漆器蔵、店蔵、繭蔵、高品蔵、米蔵、味噌蔵、屏

御にも万全、誰もが一途にあこが

蔵、座敷蔵、道具蔵、物置蔵、酒蔵、藍蔵などがあり、井ノ岡町は主に米蔵です。

また倉は穀物を納める所であり、穀倉、籾倉、神倉、官倉、礼倉などに使われま

した。庫は文字どおり車を入れておく建物の意味で、車庫、文庫、金庫、山車庫、書庫などです。このように日本にはいろいろな用途の「くら」がありますが、井ノ



黒い瓦屋根と白い壁が特徴の土蔵

岡町民家の土蔵は主に屋敷

構成として、主役は母屋であり「くら」は脇役としてたたずんでいますが、どれも堂々とした構えに変わりはありません。「くら」を見ると、どれもこれも、かつては人々の生活に一つとして欠かすことのできないものばかりでした。



道祖神は、道端にあって悪霊や疫病などを防ぐ神。丸石や男女二体の石像などを神体としています。

蔵を造る左官職人の世界に「紙一枚」という言葉があります。土蔵の入口や窓には、いつも開いている漆喰の重厚な扉が目に入りま

す。このどつしりとした観音開きの土戸は、見せるためばかりでなく、大切な財産を守るのが蔵の存在価値の一つでもありました。ひとたび火が出たら、人々は蔵の窓や扉をしめて避難をしました。たとえ紅蓮の炎に包まれても、蔵の中に火を入れるわけにはいかな

い。閉じられた扉に少しでも隙間があれば、火は容赦なく蔵の中まで侵入し、全て灰塵と化してしま

います。それを防ぐため、左官職人の鍔塗りの技術がありました。閉じた扉と扉の間に一枚の紙を挟

んで、その紙がすべり落ちないと

ころまでの精度を求めたのです。これができると一人前の蔵造りの仲間入りができました。土工、石工、大工、葺師、細工、鍛冶などあらゆる職人が、左官の紙一枚と同じレベルの技を出しあつて一つの蔵が完成されました。蔵には日本の伝統的技術が見事に集約されているのです。と思いつつ井ノ岡

の蔵を再度見渡すと黒い瓦と白い壁が冬の夕焼けに照り返し、絵

画のようです。小道の角には「道祖神」があり、お米、小銭が供えられて

います。信仰の厚い集落です。集落の社として「井岡神社」があり祭礼は毎年12月28日にとり行わ

れます。また、地元産物の代表として「河童大根」がおいしく、生産

農家も増えてきました。